音楽をめぐる政治学（下）

――「読者の声」というアクター ――

浅　野　一　弘

目次

１．はじめに
２．札幌コンサートホール Kitara の概要
３．札幌コンサートホール Kitara 建設・パイプオルガン設置決定の要因
（１）札幌交響楽団と PMF の存在（以上，第62巻）
（２）STP と札幌市音楽専用ホール・オルガン設置期成会の存在
（３）北海道新聞社の存在
４．結び

（２）STP と札幌市音楽専用ホール・オルガン設置期成会の存在

さきにもふれたように，Kitara 建設の一助となったものに，さっぽろシアターパークプロジェクト＝ STP の存在があったとみることもできよう。ここでいう「シアターパーク」とは，「STP が生み出した造語」であるが，「様々な専用文化施設，たとえばオーケストラ中心の大ホール，室内楽やソロコンサート等にふさわしい中小ホール，オペラ劇場。また舞台と客席が一体感を保てる演劇専用劇場，実験的な小劇場など，それぞれに専門性の高い施設を緑あふれる公園のなかに点在させ，様々なジャンルの，プロ，アマ，学生，市民，こども等が自在に交流するなかで市民が芸術に親しみ，札幌独自の創造活動を

行い世界に向けて発信する，札幌の芸術文化の中心」をさすようだ[76]。

1990年７月30日の「旗揚げと同時にSTPが取り組んだ最初の事業が『５万人署名100円募金』運動」であった[77]。STPの発足について報じた地元紙によると，「これを資金に期成会をつくり，事務局を運営するほか，自ら公演を主催したり，各種公演プログラムに呼び掛け文を載せるなど市民にPRする」ことを活動の主眼としたようだ[78]。そうしたさまざまなとりくみのなかで，たとえば，第１回（1991年２月23日）から第９回（1994年８月23日）まで開催されたシンポジウムでは，以下のようなテーマがとりあげられている（図表１参照）。

図表１　STPシンポジウムのテーマ一覧

第１回　公共ホール建設の経緯と実際
第２回　シアターパーク構想への提言
第３回　日本の演劇創造の現場とアメリカのリージョナルシアター
第４回　専用ホールの運営と事業企画
第５回　秋田アトリオンホールのパイプオルガン運用
第６回　北海道・札幌の演劇創造の未来展望
第７回　札響と市民を熱いきずなで結ぶ討論会
第８回　劇場って何だろう
第９回　北の文化とまちづくりフォーラム　私のまちでは…

出所：「STPの活動記録」編集委員会編「STPの活動記録－1990→1995－」（1995年），10頁。

「札幌市のホール建設計画の進展に応じ，その時点その時点で最も大きな検討課題を取り上げました」とされるシンポジウムの登壇者をみても，北海道在住者だけでなく，水戸芸術館事務局長（第１回）やサントリーホール企画制作部部長（第４回）などが参加しており[79]，活動の力点が，シンポジウムの開催にもおかれていたことがわかる。ここで，第５回の「秋田アトリオンホールのパイプオルガン運用」（1992年11月30日）に注目してみたい。このとき，秋田県総合生活文化会館館長とアトリオンホール専属オルガニストをむかえて，質疑応答がおこなわれているが，会場からは，「コンセプトづくりということを先ほどオルガニストの方が，言われてましたが，非常に難しいと思うんです。まさにおっしゃったこと，我々オルガンを入れて何をするのかということが問題

になってくると思いますが，我々オルガンを欲しい欲しいと言っているけれども，実際のところコンセプトというのは漠然としている状況ではないかと思います」との発言もでている。こうした声を受けて，前出の山科も，「色々な市民の方から，今日も声がありましたが，パイプオルガンは今のところ無駄ではないかという消極的な意見も出ています」との思いを吐露している[80]。さらに，のちにKitara Organ Club会長となる石黒直文も，「90年代のはじめ，札幌に音楽ホールをつくる計画の当初，必ずしもオルガン設置は既定の事実ではなかった。むしろ，オルガン不要論の方が優勢だったかもしれない」と語っている[81]。

ちなみに，「STPのシアターパーク構想は，音楽専用ホールにパイプオルガンを設置する前提ですすめられてきました」ということもあって，「利用頻度が低く高額であるなどの理由で設置を見送る考え」にたっていた札幌市役所に“圧力”をかけることを目的に，「STP，北海道音楽団体協議会，北海道国際音楽交流協会（ハイメス）などを中心に，市内の主な音楽団体が総出」となって，「〔1992年〕11月10日，『札幌市音楽専用ホール（仮称）のパイプオルガン設置期成会』を発足させ，会長を河邨文一郎氏にお願いすること」（〔　　〕内，引用者補足）としたのである[82]。会長となった河邨文一郎は，「札幌冬季五輪の賛歌『虹と雪のバラード』の作詞などで知られる北海道を代表する詩人」であった[83]。

当時，札幌市は，「世界トップクラスの音響効果を持つホール」の建設をきめたものの，「パイプオルガンについては当初見合わせていた」こともあり，「『オルガンは一流ホールの条件』と導入を希望する市民ら」（傍点，引用者）が中心となって，同会を発足させ，「署名と陳情活動を展開」するなど，「市がオルガン導入を決める原動力となった」そうだ。くわえて，「市は決定の際，多額の費用がかかるオルガンが『宝の持ち腐れ』とならないよう，同期成会を中心とする市民と協力して有効活用を図る方針を打ち出した」とのことである[84]。そのため，なかには，同期成会による「二万人を超す署名が流れを変えた」（傍点，引用者）とする指摘もあるほどだ[85]。このとき，オルガン設置期成会・

事務局長として運動の中核をになった谷本美智子は，つぎのように述懐している[86]。

札幌市にこの問題について再考してもらうために残された道は，「音楽専用ホールを市民の宝にするために，是非ともオルガンを」という私達の考えを，直接市民に訴えることでした。こうして始まったのが市民の皆さんに呼び掛ける『パイプオルガン設置を求める署名・100円募金運動』です。その頃，妥協案としてオルガンはホール建設の何年か後，しかるべき時期に設置するという話もでていましたが，私達の考えはオルガンの設置はホール建設と同時にということでしたので，ホールの設計コンペ前に運動の成果が出る必要がありました。とにかく時間との勝負，皆で手分けして精力的に署名・募金活動を始めました。

こうした運動の成果であろうか，STP 代表幹事・山科は，「私達の活動を基盤に，札幌市は，中島公園内にパイプオルガンつき 2 千席の大ホールと 5 百席の小ホールをそなえた専用音楽ホールの建設を決定，2 年後の『パシフィック・ミュージック・フェスティバル（PMF)』でオープンすることとなりました。私達 STP は，新しいホールの基本設計について，音楽ファンや専門家の声を細部にわたり反映させ，札幌にもっともふさわしい国際的ホールの実現に向け努力してまいりました。パイプオルガンの設置についても，たくさんの市民の声を集めて，その実現を達成することができました」との感想をもらしているのだ[87]。その後，「期成会は1997年の音楽専用ホール完成に向けて改めてオルガン音楽の普及と有効活用のための活動に取り組むことになり，準備期間をおいて12月規約を改正，新たに会員を募り，名称も『札幌市音楽専用ホール・オルガン設置期成会』」へと改称したのであった[88]。

ただ，ここで気になるのは，STP によって，1991年 6 月に小冊子にまとめられた「シアターパーク構想」のなかにある「音楽ホールの施設計画」に注目すると，「コンサートホール」の「小ホール」には，「付帯物件」として「パイ

プオルガン」の文字が明記されているだけでなく，「オルガン演奏会」の開催も予定されていることだ。しかし，現実にパイプオルガンが設置された「大ホール」のほうには，パイプオルガンという文字はいっさい記されていない。ただ，STP が発行していた「シアターパーク通信」第 4 号（1992年 3 月）には，「STP 内の音楽部会，開催。札幌市の文化施設全体を STP の視点から方向付けし，提案へ。」と題する記事があり，パイプオルガンについて，「中ホールに設置，または水戸のようにエントランスホールに，という案も出たが，ホールのグレードを上げるという点からも大ホールに設置が適当」との記述がなされている。ここにある「ホールのグレードを上げる」という書き方からは，活用のあり方以前に，“一流の”音楽専用ホールにパイプオルガンが設置されていることは至極当然といった意識がかいまみえる[89]。その証左に，前出の Kitara 館長・松前も，「高い投資でしたが，ホールに威厳を与え，価値を象徴するものとなった」と，パイプオルガン設置の効能について語っている[90]。

さて，『北海道新聞』の分析によれば，当初，「市がオルガン設置をためらったのは理由のないことではない。現在活動しているオルガニストの数はピアニストなどに比べて極めて少なく，稼働率が高いホールでもプロ奏者の演奏はなかなか聴けない。『高額なオルガンが十分活用されないのでは』との懸念だ」とのことだ[91]。しかも，「すでにオルガンが設置されているホールの担当者は『市民に根付くには時間がかかる』と口をそろえる」らしく，「無料コンサートなども『客席が半分埋まれば上出来』。東京・サントリーホールでさえ，満員になるのは『超一流奏者の公演とクリスマスやバレンタインの日に限る』のが現状」であるようだ[92]。

ここで，オルガン設置期成会が主催した演奏会についても紹介しておこう。「『多くの市民がオルガン音楽を楽しめる下地づくりを』との願い」から，1994年 1 月11日には札幌パークホテルのパークチャペルで，13日には北大クラーク会館で，コンサートをおこなっているし[93]，1995年11月28・30日には，札幌北光教会での演奏会をひらいている[94]。また，3 月 7 日には，札幌パークホテルのチャペルでのイベントが，札幌市との共催によっておこなわれている[95]。

さて，「市議会での審議を通しても市当局は，ホールにパイプオルガンを設置する計画を明確にしていない」段階の1992年10月25日の『北海道新聞』には，「＜読者の声＞　パイプオルガンの設置実現を望む」（投稿者：札幌市西区）が掲載された。そこでは，「全国の主要都市の音楽ホールに，オルガンとオルガニストが配置される昨今である。欧米に比べて歴史が浅く，なじみが薄いパイプオルガンだからこそ，この機会に設置して内外のオルガニストによる演奏に親しみ，気軽な市民コンサートや入門講座など多面的な音楽活動の機会を設けてほしいと思うのである。その実現を阻むものが財源難ということなら，ドイツ・ミュンヘン市民がかつて音楽堂建設に寄付金を広く寄せたように，私たちも募金活動をしたい。音楽関係者のリードをぜひお願いしたいものだ」との意見がよせられているが(96)，このオルガン設置期成会も募金活動を実施したという。はたして，どれほどの金額があつまったのであろうか。

「オルガンは単なる飾りではなく実際に演奏するために必要であり，札幌市および北海道内に大型の本格的パイプオルガンがないために西洋音楽の基礎ともいうべきオルガン音楽に接する機会がないことは大きな不幸である」との主張をかかげて，11月10日の「札幌市音楽専用ホール（仮称）のパイプオルガン設置期成会」の発足と同時に，「２万人を目標に署名・募金活動を開始」したところ，「年末までに目標を達成」し，Kitara 着工前の「12月28日，市長に対し，22,788名の署名に，贈呈金1,507,430円（募金総額3,007,430円の一部）の目録とオルガン有効活用のための『運用計画案』を添えて提出」したという(97)。

ただ，ここで留意しておきたいのは，パイプオルガンの総工費が約３億円であるため(98)，この贈呈金の額は，総工費のわずか0.5％でしかないという事実である。しかも，この時点では，「市はパイプオルガンの設置について来年度のホール基本設計の決定時に明らかにする方針で，場合によっては募金が宙に浮く可能性」さえあったのだ(99)。同期成会の会長・河邨は，「札幌の音楽ホールにパイプオルガンを設置してもらおうと，私が会長を務める設置期成会をつくり署名運動をやった。短期間で二万人も集まりました。百円募金もやった。百円出した以上は聴きに来るだろう，と。行政に対して要求して勝ち取るだけ

ではなく，こちらから提案し，アイデアを交換し合って協力していく提案型の運動が大切だと思うんです」と豪語していたが[100]，パイプオルガン設置を目的とした“ロビイング”に支払われた費用は，わずか150万円であった。しかも，当初，札幌市役所側から「パイプオルガンの設置について，予算と利用頻度の点から見送りたいとの案が提示」された折り，「山科 STP 代表は，二億五千万～三億円とされる設置費用について，市民の協力を求めるべく運動を起こすことも可能ではないか」と断じていたにもかかわらず[101]，「今回の市への寄付は，当初，期成会活動に使う予定だった募金の額が予想を超えて多かったことから，オルガン設置のため使ってもらおうと急きょ，市に贈ることにしたもの」でしかなかったという[102]。さらに，その金額も，費用の0.5％分でしかない。金額の多寡は問題ではないとの声があるかもしれない。だが，こうした言行不一致の態度は，きわめて無責任といえなくはなかろうか。とはいえ，同期成会以外にも，国際ソロプチミスト札幌中央（本多節子・会長）が，「認証十周年を祝う記念式典を開き，同市に小型のパイプオルガン（五百万円）を寄贈」し，そのパイプオルガンが「中島公園に完成する予定の音楽専用ホールで利用される」との動きがあったこともまた事実である[103]。

ところで，オルガン設置期成会・会長の河邨は，「札幌のホールも運営は音楽を作る側，聴く側，行政とのジョイント組織を考えています。オルガンの活用についても，期成会が中心になって市民に聴く機会をつくる推進プランを練っている」と明言していたにもかかわらず[104]，いまでは同団体は存在しない。関係者によると，「オルガン設置期成会は，1997年のコンサートホール完成に向けて，市内既存のオルガンを利用したシンポジウム，レクチャー，オルガンコンサート等を行い，市民のパイプオルガンへの理解を促進するための PR 活動を展開しました。また，組織としては，オルガン音楽のみならず，コンサートホール全体の『ホール・メイト』的な支援組織として展開することを考えていました」とのことだ。さらに，「1996年に会の名称を『Kitara Organ Club』に改称」し，「ホールオープン後も，オルガン事業の提案，助言や広報誌の発行を行っていましたが，専属オルガニスト制度が導入され，札幌コン

サートホールがオルガン事業を着実に推進する道筋ができたこと，また，ホールの友の会組織 Kitara Club の運営も軌道にのったことなどから，初代専属オルガニストの着任とデビューリサイタル（1998年10月開催）を機に，その役割をコンサートホールに委ね解散に至った」ようである[105]。Kitara Organ Club の発行する「オルガン通信」第10号（1997年10月）において，同 Club 会長の石黒は，「1997年夏，市民が待ち望んでいたオルガンが札幌にやってきた。世界最高のすばらしいホールのなかで最高のすばらしい音を聴く幸せをわれわれは手に入れた。しかし，われわれのやるべきことは，まだ始まったばかりなのだ」と断じていた[106]。だが，このつよい決意表明のことばとは裏腹に，そのわずか１年後に，同 Club は解散してしまっているのだ。

さらに，「シアターパーク通信」第９号（1993年１月）には，パイプオルガン設置期成会は，「設置の決定がでるまでさらに活動を継続」するだけでなく，「設置後もオルガンの有効運用に関して責任ある活動を展開するため，運用計画をさらに煮詰める考えです」（傍点，引用者）との記述がみられる。その後，「三月十六日の札幌市議会予算特別委員会で，懸案のパイプオルガン問題がようやく決着」したことを報じた「シアターパーク通信」第10号（1993年５月）では，「市は期成会が今後も活動を継続することを前提に設置を決めており」とも明記されている[107]。さらに，前出の谷本も，「オルガン設置期成会が『オルガン運用計画』の実施に責任をもつことが，市長の要望」と述べている[108]。にもかかわらず，1998年10月，同期成会をひきついだ Kitara Organ Club が解散するなど，理由はどうであれ，あまりにも無責任との批判がなされてもしかたがないように思われる。結局は，音楽専用ホールにオルガンを設置することだけが目的であったのではないかとの非難がでても当然であろう。期成会の発足にあたって会見した会長の河邨が，いみじくも，「日本の専用ホールのほとんどに設置されているのに，札幌に無いのは承服できない」と語っていたことは，同期成会の本質を物語っているのかもしれない[109]。

しかしながら，短期間の活動で，しかも微力であったとはいえ，オルガン設置期成会の動きがあったことは事実である[110]。ただ，Kitara のホームページ

において，パイプオルガン購入の背景に，市民の募金活動があったことはいっさいふれられていない。それに対して，「北九州ソレイユホールのパイプオルガン」の場合，「北九州市内最大の客席数（2008席）を有する当ホールにはドイツの老舗ヴァルカー社製のパイプオルガンがあり，設立時の1984年（当時九州厚生年金会館）に『音楽を愛する文化を育てよう』と市民，企業，自治体が一体となって取り組んだ募金活動により２億円をかけて設置されました」「政府の方針で売却が予定された九州厚生年金会館について，ホールやパイプオルガンの存続を目指す市民活動の実行委員会が平成19年11月26日に設立され30万人分の署名を目標に活動を開始されました。結果，41万人を超える署名が集まり，市民や市議会の強い存続要望に応え，北九州市が取得を発表，存続が決定しました」といった具合に，ホームページ上で，市民との協働の成果がうたわれている[111]。

こうしたちがいをみるにつけ，はたして，札幌の地に，音楽文化が根づいているといえるのかという疑問があたまをもたげてくる。

（3）北海道新聞社の存在

札響，PMF，STP，さらにはオルガン設置期成会が，少なからず，Kitara誕生と同館へのパイプオルガン導入の要因となっていたことがわかった。だが，これらのほかに，ホールの建設やパイプオルガンの設置を促進するためのアクターは存在しなかったのであろうか。ここでは，『北海道新聞』の記事に着目して，検討してみたい。

たとえば，1991年８月～９月に，「道銀文化財団」が，「道民の芸術文化に対する意識調査」を「札幌，旭川，函館，帯広，釧路，北見の六市などの三千六百人を対象」として実施したが，ここであった回答のうち，「充実してほしい文化施設としては，音楽専用ホールが三九・九％で最も多く，文化会館二六・七％，公民館や地域の集会施設二五・一％の順」となっていたことは[112]，札幌市に対して，音楽専用ホール建設の暗黙の“圧力”となっていることはまちがいなかろう。さらに，「道経済同友会，文化都市へ企業は貢献を－利益の

１％拠出を提言」という記事のなかの「提言は，本道の都市における文化の現状を，音楽専用ホールなどの施設と資金・人など運用ノウハウの両面でぜい弱だ，と指摘」し，企業にくわえ，「行政，市民にもそれぞれ予算，家計から一％ずつを文化に振り向けること」をうたっているのも，おなじ文脈ではなかろうか[113]。

こうした住民の声という観点からは，『北海道新聞』に掲載されている，＜読者の声＞欄の存在も大きいように思われる。例をあげてみると，1992年１月５日の「＜読者の声＞　92私の願い－札幌にも欲しい音楽専用ホール」（投稿者：札幌市東区）では，「PMF の提唱者レナード・バーンスタイン氏の遺志を継いだ札幌では，毎年 PMF を開催することになって，音楽の分野でも世界の舞台に登場するのだから，大規模な国際的音楽イベントの実現ができるような音楽専用ホールの建設が要望される」との希望が述べられる[114]。また，27日の「＜読者の声＞　音楽ホール建設，市民運動展開を」（投稿者：札幌市南区）においては，「札幌市の姉妹都市ミュンヘン市の音楽・オペラハウスを建設するのに，市民がビールのジョッキ一杯分の献金運動を広めたと聞いています。札幌の音楽ホール建設も，市当局に依頼するだけでなく，未来の青少年や若い芸術家のために，ビール一杯やたばこ一箱代程度を，市民こぞって拠出するくらいの市民運動に盛り上げたいものです」との意気ごみも示されている。くわえて，「音楽堂にはパイプオルガンを必ず設備することも忘れずに提案します。日本には公共施設にパイプオルガンが極めて少ないことが，オルガンの演奏を阻んでいます」とし，パイプオルガンの設置が絶対条件であると訴える[115]。

２月16日には，札幌生まれで，デンマーク在住のオルガニストの「＜読者の声＞　公の場に欲しいパイプオルガン」が掲載され，「札幌にもようやく公共の音楽専用ホールが建てられるという朗報を耳にした。そこでぜひ期待したいのはパイプオルガンの設置である」と唱えている。その理由として，「神奈川県民ホールをはじめ，今や全国主要都市のほとんどのホールに，大規模なオルガンが設置されている」にもかかわらず，「東京以北で最大都市の札幌には，まだ公共ホールにパイプオルガンがない」点をあげる[116]。さらに，みずから

PMF の合唱団の一員として市民会館の舞台で歌った人物の「＜読者の声＞音楽専用ホール，早期建設を望む」（投稿者：江別市）では，「歌う身になって言うといかんせんステージが実に狭いのです。PMF のオーケストラのメンバーでいっぱいで，われわれは肩身の狭い思いをして歌わなければなりませんでした。この悪条件を改善しなければ良い音楽は奏でられません」とし，「悪条件が気にかかります。一日も早く，文化の殿堂『音楽専用ホール』の完成を願ってやみません」との意見をのせていた(117)。

これらの＜読者の声＞が，Kitara の必要性を北海道民や札幌市民に感じさせるのに役だったことは，想像に難くない。数多くよせられた投書のなかから，新聞社が選別して記事化することはまぎれもない事実である。音楽専用ホールの建設やパイプオルガンの設置に対して，否定的な＜読者の声＞が掲載されていないということは，北海道新聞社自体，Kitara の建設に肯定的な態度を示していた証左といえよう(118)。現に，北海道新聞社のある関係者は，＜読者の声＞欄に，「わが社の主張と180度ちがうのはのせてないんじゃないかな」と述べている(119)。

そうしたなか，1992年 9 月11日に，「公立で道内初の音楽専用ホール，札幌市が建設へ－中島公園内に地上 5 階建て」という“吉報”が紙面をかざる(120)。

札幌市は，公立としては道内初となるオーケストラピットなどを備えた市立音楽専用ホールを，同市中央区の中島公園内に建設することを十一日までに正式に決めた。

計画によると，ホールは地上五階，地下一階建てで，約二万平方メートルの広さ。二千席の大ホールと五百席の小ホールを設置する。平成六年に着工，完成は九年の予定。総工費は約百八十億円を見込んでいる。設計はデザイン公募によるコンペ方式を，同市で初めて採用する。

建設地については，以前から中島公園を有力候補地として検討を進めていたが，都市公園法の絡みから緑地部分に新たな施設を建てることが不可能なため，現在ある「子供の国」を移転させ，その跡地に建設することにした。

音楽専用ホールは，本州各都市で最近，建設が相次ぎ，道内でも音楽関係者を中心に建設を求める声が強まっていた。

だが，当初は，「音楽関係者から要望の強かったパイプオルガンについては『演奏機会が少ない割に，最低でも二億五千万円の資金が必要。設計の際も考慮はするが，導入は難しそう』（市民局市民文化課）。PMF 開催や札響の四管編成化をにらみ，古典派音楽を重視した設備になるという」との報道がなされていた(121)。そのため，建設決定を報じる記事が掲載されたあとも，Kitara へのパイプオルガン設置を求める＜読者の声＞はつづく。たとえば，18日には，「札幌市の音楽ホールが中島公園内の『子供の国』跡地に建設されることが決まったと新聞で報じられていたが，非常に喜ばしいことである。しかし，その中でパイプオルガンの設置が見送られると聞いて，どうにも納得がいかない」との書きだしからはじまる，「＜読者の声＞　パイプオルガン，中島公園にぜひ」（投稿者：札幌市豊平区）が掲載され，「オルガンはホールができてからそのあとに設置することは不可能で，ホールの設計段階で決められるべきものだろう。とすれば，今この機会を逃してしまっては百年の悔いを残すことになりかねない。本州の地方都市にさえオルガンつきのホールがどんどんできているのに，PMF（パシフィック・ミュージック・フェスティバル）の開催都市でもある札幌にこれがまだないのは，誠に残念である」との主張が展開される(122)。この意見からは，さきに示した，「PMF という世界的イベントを開催する政令指定都市でありながら，そのための立派なうつわがないのはみっともない」との意識が端的にみてとれる。

なかには，「この音楽ホールはきっとすばらしい建物で，設備も豪華なものになることでしょう。でも障害者が行きやすいホールになってくれるかどうか。例えば車いすの人が行くには入り口のスロープ，車いすのまま音楽を聴けるスペース，全盲または弱視の人には建物内外の点字タイルなどが必要です。札幌市内の公的な建物の中には，まだこうしたことが考慮されていないところもあり，あとから指摘があって造り直したところもあります」としたうえで，「設

計の段階から，いろいろ障害者団体に相談したり，問い合わせしたりするなどの配慮をいただきたいのです。総工費は約百八十億円といわれているようですが，設計に当たっては，ぜひ障害者への優しさを忘れないようにしてほしいと思います」といったように，弱者への配慮という重大な視点を提供するコメントもある（「＜読者の声＞　音楽ホール設計，障害者に配慮を」〔投稿者：札幌市北区〕）[123]。

また，「札幌市が中島公園に計画中の音楽専用ホール建設に当たり，パイプオルガンの設置に市が難色を示しており，その設置を求める期成会が発足，今後署名集めをするという」とし，「市の姿勢は，実は恥ずべきことで，音楽専用ホールにパイプオルガンの設置は常識。論議の対象外のはずだ」とする“強硬論”（「＜読者の声＞　パイプオルガンは常識」〔投稿者：札幌市東区〕）も，同社の主張にそったものである可能性がたかい[124]。おなじことが，「＜読者の声＞　パイプオルガン，ホールに設置を」（投稿者：札幌市厚別区）についてもいえよう。「札幌市にも本格的なコンサートホールができるということで，非常に楽しみにしています。今，このホールにパイプオルガンを設置するかどうかで意見が分かれているようですが，ぜひ導入してもらいたいものです」からはじまり，「オルガンの使い道は大変多くあり，今回のパイプオルガンの設置は決して無駄な買い物になることはないでしょう。学校の音楽教室や，一般市民を対象としたカルチャー教室など，利用方法はいくらでもあります。この機会にぜひパイプオルガンを設置してほしいと思います」と，地域に根ざしたパイプオルガンという視点を前面に打ちだしているのが特徴である[125]。音楽文化という観点を強調したものが，「＜読者の声＞　パイプオルガン設置効果に期待」（投稿者：岩見沢市）である。冒頭でこそ，「二年後に札幌市が着工を予定している音楽専用ホールに，パイプオルガンの設置を求める声が高まる中で，『そんな高価な楽器を入れても十分な活用ができるのだろうか』との反対意見も根強いと聞く」と記されているものの，そのあとは，「確かに据え付けられる建築物全体を共鳴器とし，発音体である音管は一万本以上林立するものもあるというから，最も大規模で最も高価な楽器であることは間違いない。しかし，バッハを頂点としてバロック時代に残された幾多の独奏曲や協奏曲，そして通奏低

音を奏でる管弦楽曲やカンタータなどのオルガンの名曲が，せっかくの新しい音楽ホールに永久に響かないのかと思うと実に残念だ」としたうえで，「管弦楽にも劣らぬ壮大で多彩な音によって，聴く者をバロックの世界にいざなう楽器の王者パイプオルガンの設置は，単に音楽愛好家だけの利益でなく，札幌市の，ひいては北海道の音楽文化の発展に大きく貢献するものと信ずる。関係各位のご努力に期待したい」と結ばれている(126)。

そのようななか，パイプオルガンについて，一見消極的ともとれる「＜読者の声＞　パイプオルガン，欲しいけれど…」（投稿者：札幌市北区）が掲載されたのは注目にあたいする。ここでは，ヨーロッパの教会に設置されたパイプオルガンについてふれたのち，「あの荘厳な響きに浸って神の威光を感じる人々の国とは違った国の都市で，行政の首長に『億』の買い物を迫るのは，ご苦労なことと思う」との記述がみられる。しかし同時に，「札幌市が計画している音楽ホールにパイプオルガンを設置するかどうかが話題になっているが，私もオルガンは欲しい」（傍点，引用者）との見解が示されていることも忘れてはならない(127)。

こうした北海道新聞社の“キャンペーン”のかいあってか，2回目の“吉報”＝「札幌市立音楽専用ホール，国内最大級パイプオルガン設置へ」との見出しが踊る(128)。

札幌市は，建設計画を進めている道内初の市立音楽専用ホールに，道内では最大のパイプオルガンを設置することを十六日の札幌市議会で表明した。これで，道内でもパイプオルガンを使った大規模なコンサートが開催可能となる。

パイプオルガンは，高さ，幅とも約十メートル，奥行きは約四メートルで，国内でも最大級。購入費用は二億五千万－三億円。現代楽器の音域はすべて出せる。

現在，パイプオルガンは道内に二十数カ所にあるが，ほとんどは教会で，いずれも規模が小さくて出せる音域に限界がある。このため，道内でパイプ

オルガンが必要なコンサートでも，電子オルガンで代用していた。

市は，設置にばく大な費用がかかる割には利用頻度が少ないからと，導入に難色を示していたが，市内の音楽関係者らが昨年秋に設置を要望する既成会を結成。今年三月に二万人を超える署名とパイプオルガン演奏会開催などの利用計画を市に提出し，設置を求めていた。

また，『北海道新聞』は，1993年11月22日に，「国産としては最大のパイプオルガン＝写真＝が，近く落成する宮崎市の宮崎県立芸術劇場にこのほど完成した」という記事，さらには，27日に，「山梨県・白根町の『白根桃源文化会館』のコンサートホールに大型のパイプオルガン（高さ7.3メートル，幅8.3メートル）が登場した＝写真＝」との記事をともに写真つきで掲載しているが[129]，これも，Kitara のパイプオルガン設置をもりあげるキャンペーンの一環ととらえることはできないであろうか。

このあとも，『北海道新聞』は，「音楽専用ホールのあとに劇場をつくるという方針を札幌市はうちだしているが，まだ場所も未定である。早く場所を選定して大劇場が無理なら五百人ぐらい収容の小劇場をまず造り，そのあとに大きなものを造る方向を考えてもよいのではないか」とする演劇札幌座会座長のコラムや[130]，「札幌市の構想でも，能楽堂は，九七年に完成する音楽専用ホールとともに市民の芸術文化活動に必要な施設と位置付けられている。各流派や関係団体も期成会を設立して，早期設立を市に呼び掛けるなど，盛んに建設促進運動が行われている」とする記事を掲載するなど[131]，芸術文化活動のためのハード面での整備をあとおししているような印象を受ける。

こうした傾向は，『北海道新聞』朝刊１面の「卓上四季」にもあらわれている。これは，『朝日新聞』の「天声人語」にあたる欄であるが，そこでも，「先日，北大クラーク会館でブダペスト生まれのオルガニスト，ラントシュ・イシュトヴァーンさんの演奏を聴く機会があった」としたうえで，「札幌・中島公園に三年後オープンが予定されている音楽専用ホールにはクラーク会館をはるかに上回るオルガンが収まるという。ストップ数約六十（北大二十四）パイ

プも約五千本。仏『アルフレッド・ケルン社』に近く発注される▼壮大なこの楽器にとってはホールそのものが共鳴箱になる。札幌の，北海道のというより『日本最高級のホール』でシュバイツァー流の感動を改めて体験できる日が楽しみだ」とのコラムがかかげられた(132)。

その『北海道新聞』において，芸術文化をめぐる若干消極的な記事が，1994年３月15日の夕刊ではじめて登場する。「札幌市の新年度予算は『演劇専用ホールと能楽堂建設基礎調査費』の名目で金額は計百万円」という関連で，前出の「STPは『演劇専用ホール』実現に向け」て，「STPから派生する形で昨年二月に『札幌演劇財団（仮称）設立準備会』（会長・同）も新たにスタート」と報じた記事のなかで，「『札幌に演劇専用ホールを』――。素晴らしい構想だが，設置には多額の費用が必要で，つまり税金を投入することになる。今後，現実を見据えた論議を重ねる必要もありそうだ」との慎重姿勢を示しているのが興味深い。しかも，「現状で演劇に最適なのは札幌市教育文化会館とされるが，こちらは『年間の稼働率が一〇〇％近い』という人気ぶりで，会場の確保が難しく，余裕をもってリハーサルに使ったり，長期公演は不可能」としながらも，演劇専用ホールの建設に消極的なスタンスをとったのだ(133)。

では，『北海道新聞』の紙面で，パイプオルガンに対して否定的な記事が初掲載されたのは，いつのことであろうか。それは，管見のかぎり，1995年５月26日の夕刊においてであるように思われる。この記事では，「市がオルガン設置をためらったのは理由のないことではない。現在活動しているオルガニストの数はピアニストなどに比べて極めて少なく，稼働率が高いホールでもプロ奏者の演奏はなかなか聴けない。『高額なオルガンが十分活用されないのでは』との懸念だ」としたうえで，「実際に，住民の要請でホールにオルガンを設置したにもかかわらず，後年オルガン音楽の普及活動が失速してしまった例」＝「東京・武蔵野市の愛好者団体『オルガン友の会』」を紹介している(134)。ちなみに，この記事は，22日からスタートした連載（計10回）の５回目にあたるものであるが(135)，ほかの連載記事では，「宮崎県立芸術劇場の音楽ホールは完成直前になって客席の一部に欠陥が見つかり，設計を変更して改良した。

Kitara も随時，専門家に点検してもらい，問題点があれば直していく柔軟さを期待したい」（1回目）[136]，「既存の業界との競合を避けつつ，札幌の音楽ホールにふさわしいどんな『顔』を作っていくか。今月末に方針を話し合う企画委員会の責任は大きい」（3回目）[137]，「いずれにしても料金や使用規則は最大の関心事。それが明らかにならないと，使う側も計画を立てにくい。せっかくのホールが敬遠されないよう，利用者の意向・要望を十分に取り入れた形で早急に決定，公表することが望まれる」（8回目）[138]，といった具合に，注文をつけてはいるものの，批判的な論調を読みとることはできない。その意味で，26日に掲載された，「＜音楽都市への道　札幌「Kitara」序奏＞5＊オルガンのある街（上）＊演奏の魅力を市民にも」は，異色の記事といってよかろう。

このような『北海道新聞』において，Kitara への批判が前面におしだされたのは，開館翌日の「Kitara オープン＊豪華すぎ？ 191億円ホール＊床や壁に大理石多用＊赤字見込み毎年5億円＊運営に大きな課題」とする見出しの記事においてであった。ここで，興味深いのは，同記事のなかにあった，「市が総額百九十一億円を投じ，大理石を多用した造りには疑問の声も。『これほど豪華な造りにする必要があるのか』」との指摘である[139]。おなじような論調は，開館まえの記事にもみられ，「床を見て驚いた。ジョージアマーブルと呼ばれる天然大理石が輝いている。このほか，階段や壁面には道産のマカバ材や札幌軟石が使われており，『一流ホテルのロビーより豪華』（ホテル関係者）な雰囲気だ」「市民からは『お金のかけすぎ』という批判も聞かれる」とあった。だが，当該記事では，同時に，「音楽関係者やファンの期待は大きい」「国内でも有数の設備を誇る音楽専用ホールで，大理石や道産木材をふんだんに使った高級感あふれる内部は，見るだけでも価値がある」と，そうした批判を打ち消すかのような文言も併記されていたのだ[140]。

少なくとも，Kitara の開館までは，そのあとおしにつとめてきた『北海道新聞』ではあるが，1990年4月16日の同紙をみると，「どういった建物を造るかといった具体的な討議はこれから」という段階で，すでに，同紙の文化部記者は，「新しいホールが新たな需要を呼び起こしたとしても，座席数の関係な

どから既存の会場を選ぶ団体も予想され，東京のようにクラシックの演奏会だけで埋まることは難しそうだ」との予測を示していたことは，注目にあたいする[141]。このような声がありながらも，『北海道新聞』は，Kitara の建設とパイプオルガンの設置については，積極的にサポートする姿勢をとりつづけたといえる。たとえば，1996年11月２日にいたっては，朝刊１面に，「来年夏に開館する札幌コンサートホールに据え付けられる国内最大級のパイプオルガン製作が，仏アルザス地方の中心都市ストラスブールのオルガン工房で大詰めを迎えた。一日，札幌市民でつくる『キタラ・オルガンクラブ』のメンバーら二十五人がはるばる渡仏して工房を視察，威容を見せ始めたオルガンに感嘆の声を上げた」といった，写真入りの記事までも掲載している[142]。こうした背景には，「札響の理事長は，代々うちですよね」「専務理事は天下りポストですから」とする関係者の発言からもわかるように[143]，Kitara で定期演奏会をおこなう予定となっていた札響と，北海道新聞社との“密接なつながり”が大きく影響しているような気がしてならない。

４．結び

前出の STP が発行する「シアターパーク通信」第７号（1992年９月）には，Kitara の建設予定地まで，地下鉄・中島公園駅から「歩いてみました」とし，「地下鉄駅からおよそ八分でした」，さらには，「地下鉄幌平橋駅。こちらもちょうど八分」とし，「雨や雪の日にはちょっと遠いかな」との事務局担当者の感想がもられている[144]。ちなみに，Kitara の建設にあたっては，「公園内にシェルターや地下道を作って降雪期に備えるべきだとの意見もあった」ものの，「市長は議員の質問に『北海道は雪が降るのが当たり前なのだから，冬は雪に降られてホールに来て下さい』と毅然として答弁した」そうだ[145]。

しかしながら，近年，演奏会に足を運ぶクラシック音楽愛好家の高齢化がさけばれるなか[146]，この市長の発言は先見の明にかけたものであったとの批判はまぬがれないであろう[147]。さらに，『北海道新聞』の「＜文化施設を考え

る＞札幌・キタラ20周年＊下＊ファン掘り起こしが必要」という記事でも，「冬期間は，地下鉄駅からの路面の歩きにくさを訴えるファンも多い。市の財政難で04年12月からロードヒーティングが使われなくなったためだ。高齢ファンからは，冬は来場をためらうという声もある」とされている[148]。

ここで，「文化芸術に関する施策を総合的かつ計画的に実施するため，文化芸術に関する施策に関する基本的な計画」（札幌市文化芸術基本条例・第６条１項）として策定された[149]，「札幌市文化芸術基本計画（第３期）」をみると，そこでは，Kitara について，「音楽専用ホールとして，国内外のトップクラスの演奏家による質の高い音楽や，気軽に楽しめるワンコインコンサートなど，子どもからお年寄りまで，また，障がいのある方でも安心して施設を利用し，誰もが音楽を楽しめる機会を提供できるよう，設備のバリアフリー化などについて引き続き工夫を重ねていきます」との文言がある[150]。施設そのもののバリアフリー化も重要ではあるが，積雪期において，最寄り駅から Kitara までの道路をバリアフリー化するという視点が忘れ去られてしまっているのは残念でならない。

また，前出の藤垣によると，「演奏者を第一に考えてみた」のが Kitara であるという。その藤垣は，「今日もオーケストラの楽員は，ホテルから徒歩でキタラに向かうでしょう。演奏会場が歩いて行ける距離にあることはとても大切なことです」と断じている[151]。同様に，Kitara 初代館長の松前も，「演奏家にとっても，近くのホテルに泊まり，自分の楽器を抱えながら公園をゆっくり歩いてホールに入ることができる。こんな環境は，東京などではありえませんから」と豪語している[152]。しかし，道路がバリアフリーとなっていないことで，雪に慣れない演奏家は，積雪期の転倒の不安を感じるのではないかという疑問も生じる。演奏家にとって，腕のけがほど，さけたいものはないからだ。

つぎに，Kitara の利用者数に注目すると，「ウィーン・フィルなど有名オーケストラの公演が相次いだ08年度の44万1761人をピークに，10年度からは40万人を割り込んでいる」状態がつづき[153]，2019年度の実績では，30万1,666人にまで減少してしまっている（図表２参照）。もっとも，近年は，「新型コロナウ

イルス感染拡大防止のため，令和２年２月23日～３月31日までの主催事業を原則中止または延期したほか，同期間における貸館利用取消に対する返金を行った」こともあり[154]，減少幅が大きくなるという側面もないわけではない。

ただ，こうした入場者総数の減少の背景には，Kitara を管理する財団の認識のあまさも関係しているような気がしてならない。札幌市芸術文化財団は，PDCA サイクルにもとづき，利用率や総入場者数の見込をたてているはずだ[155]。だが，その基本となるデータがきわめていい加減なあつかいをされていたのでは正確な予測はできない。図表２のなかにある，「平成26年度」の小ホールの利用率をみると，75.5％とある。これは，「平成28年度事業報告書」に記されたものであるが[156]，「平成28年度事業計画書」では，その数字は75.9％となっている[157]。関係者によると，「『平成28年度事業計画書』を作成する際の記載ミスと考えられ，校正段階においてもそのミスに気づくことができなかったものと推測されます」とのことであるが[158]，事業計画の立案において，客観的なデータほど重要なものはないはずだ。その意味で，こうしたミスがそのまま放置されていること自体，札幌市芸術文化財団の鈍感さを露呈しているといわれてもしかたなかろう。こうした実態をみるにつけ，Kitara の未来は暗いものでしかないような印象をもつ。

ところで，Kitara は，「開館するや，『札幌にすごいホールがある』との評判が口コミで国内外の音楽関係者に広がった。これが一流の演奏者が来札する原動力となった」といわれる[159]。さらには，「『現代的なコンサートホールとしては世界最高』（ベルリン・フィル芸術監督サイモン・ラトル）とされる道民の財産」との評判[160]や「ロシアの指揮者ヴァレリー・ゲルギエフは，ホールの音響のすばらしさに感激し，『ホールを祖国に持って帰りたい』と発言した」との逸話[161]もあるほどだ。だが，どれほど音響面でひいでていたとしても，うえでみたような課題をかかえていては，まさに，“仏つくって魂入れず”の状態でしかない。うつわに満足するだけでなく，絶えず，関係者がそのうつわをかがやかせるとりくみをしていく必要があろう。

最後に，Kitara の初代館長・松前は，オープン直前のインタビューで，「約

図表２　Kitara の利用率と総入場者数（実績・見込・目標）

			平成24年度	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和２年度
実績	利用率	大ホール	85.2%	82.3%	91.1%	97.1%	86.1%	85.3%	83.9%	77.6%	—
		小ホール	67.5%	62.0%	75.5%	87.1%	77.1%	77.3%	71.9%	62.9%	—
	総入場者数		393,542人	372,479人	366,389人	360,951人	378,756人	338,921人	343,888人	301,666人	—
見込	利用率	大ホール	—	84.3%	90.0%	93.1%	85.8%	87.0%	75.5%	83.2%	—
		小ホール	—	64.8%	74.0%	83.4%	75.7%	80.0%	67.2%	68.0%	—
	総入場者数		—	377,000人	360,000人	350,000人	370,000人	345,000人	335,430人	350,000人	—
目標	利用率	大ホール	—	—	86.0%	90.0%	88.0%	88.0%	87.0%	87.0%	87.0%
		小ホール	—	—	68.0%	74.0%	70.0%	76.0%	77.2%	77.2%	77.3%
	総入場者数		—	—	350,000人	370,000人	400,000人	400,000人	380,000人	380,000人	210,000人

注：

※「舞台設備の更新・改修工事に伴う休館期間のため平成27年２月16日～６月16日まで貸出休止」（「コンサートホール事業部」〔https://www.kitara-sapporo.or.jp/about/dl/28Gaiyou_Hall.pdf（2020年８月15日）〕，98頁）。

※「平成30年９月６日～９月13日まで北海道胆振東部地震により休館」（「コンサートホール事業部」〔http://www.sapporo-caf.org/pdf/30Gaiyou_Hall.pdf（2020年８月15日〕），98頁）。

※「新型コロナウイルス感染拡大防止のため，令和２年２月23日～３月31日までの主催事業を原則中止または延期したほか，同期間における貸館利用取消に対する返金を行った」（「コンサートホール事業部」〔http://www.sapporo-caf.org/pdf/r01Gaiyou_Hall.pdf（2020年８月15日〕，94頁）。

※「令和２年11月２日～令和３年６月30日，特定天井改修工事，設備機器改修等のため休館予定」（公益財団法人札幌市芸術文化財団「令和２年度　事業計画書」〔http://www.sapporo-caf.org/pdf/2020Jigyo.pdf（2020年８月15日）〕，29頁）。

出所：資料にもとづき筆者作成。

百九十五億円の建設費，年間五億円の維持費を考えれば，キタラを疑問視する意見が出ても当然だと思います。しかし，正当な評価を受けるのはむしろ今後のキタラの在り方次第です。税金を使う価値のあるホールにすることが大切で，キタラはその資質を持っています」と力説していたが[(162)]，はたして札幌市民は，いまのKitaraをみて，どのような感想をもらすのであろうか。

（2020年９月10日脱稿）

(76)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，８頁。

(77) 同上，４頁および６頁。

「最終的には，翌年（1991年）春のSTP第１期終了までに，署名数56,342名，募金総額6,384,238円を達成」（カッコ内，引用者補足）している（同上，６頁）。

(78)『北海道新聞』〔地方版〕1990年７月31日，19面。

(79)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，10頁。

(80) 同上，137頁および142頁。

(81) Kitara Organ Club編「札幌コンサートホール　オルガン設置への道」（2004年），２頁。

(82)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，17頁および257頁。

同期成会ができた当時，「パイプオルガンの設置は，そのためのスペースこそ確保されたものの，楽器そのものの設置は見送りとなっている」状態であった（同上，257頁）。

(83)『北海道新聞』2004年３月31日（夕），１面。

(84) 同上〔道央版〕1994年１月６日，19面。

(85)『北海道新聞』1995年５月26日（夕），11面。

同期成会は，「年内に最低一万人の署名を集めたうえで期成会会長が市長に会って設置を要請します」「署名と同時におひとり百円の募金をお願いしています。活動資金に充てるためです」「期成会会員を募っています。会費一口千円で，この活動を支援していただくための会員です」といった目標をかかげ，活動を展開した（「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，257頁）。

(86) Kitara Organ Club編，前掲「札幌コンサートホール　オルガン設置への道」，３頁。

(87)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，１頁。

ただ，STPは，「音楽５団体と演劇６団体の代表者を幹事として発足すること」となったことからもわかるように，「当初目指すところは，音楽専用ホール，演劇専用ホール，そしてオペラ劇場をひとつにまとめた，国際的芸術公園を札幌に建設すること」であったが（同上，１頁および４頁），結局，いまなお，演劇専用ホールは建設にいたっていない（関係者への電話によるインタビュー〔2020年９月１日〕）。

(88)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，17頁。

(89) 同上，８頁，32-33頁および243頁。

そして，最終的に，「シアターパーク通信」第５号（1992年５月）のなかの「『音楽専用ホール建設専門部会』素案をまとめて終了。」という記事のなかで，パイプオルガンについては，「オーケストラとの共演を主目的として大ホールに設置。ホールの象徴としてふさわしいステージ正面部に設けるとしています」との結論にいたったことが示されている（同上，247頁）。

(90) 前掲「未来へ奏でるKitaraの響き」，７頁。

(91)『北海道新聞』1995年５月26日（夕），11面。

後述するように，Kitaraの建設とパイプオルガンの設置をめぐる『北海道新聞』の論調は，1994年３月ごろをさかいに変化するが，この記事は1995年５月26日のものであり，まさにパイプオルガンへの否定的な見解も示されているのが特徴である。しかも，この記事のなかでは，「実際に，住民の要請でホールにオルガンを設置したにもかかわらず，後年オルガン音楽の普及活動が失速してしまった例もある。東京・武蔵野市の愛好者団体『オルガン友の会』だ」として，教訓とすべき“失敗例”にまでふれている。そして，「盛り上がりつつある『オルガン熱』をKitara開館後にどう結び付けるかが問われよう」と結んでいる（同上）。

(92) 同上，1995年５月29日（夕），５面。

(93)『北海道新聞』〔道央版〕1994年１月６日，19面。

このとき演奏したオルガニストは，「東京のサントリーホールやNHKホールに続き，札幌市が市民グループの働きかけで本格的なオルガン導入に踏み切ったのは，文化のレベルアップという意味で画期的なことです」とコメントしていた（同上，1994年１月16日，24面）。

(94) 同上，1995年11月24日，25面。

(95) 同上，1995年３月８日，26面。

同期成会による活動以外にも，「一九九七年に完成予定の札幌市音楽専用ホール（仮称）に国内最大級のパイプオルガンが設置されるのを機に，市民の関心を深めようと，札幌オルガン研究会（富田節子会長）」が，札幌北一条教会で，「オルガン音楽とお話の夕べ」と題する催しをひらいていることを付言しておく（同上，1994年７月２日，26面）。

(96)『北海道新聞』1992年10月25日，６面。

(97)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，17頁。

「札幌市音楽専用ホールへのパイプオルガン設置を要望」した折りにだされた，「パイプオルガン運用計画」のなかでは，「運営組織の提案をはじめ，自主事業として，平日の昼休みに短時間の演奏が楽しめる『オルガン公開』や，週末の午後一時間程度の『オルガン・プロムナード・コンサート』。さらに本格的な演奏を楽しむための月例演奏会や特別演奏会。小中高生を対象とする音楽教室やオルガンに関する公開講座，オルガン祭等，多彩なオルガン運用計画」が提案されていたようだ（同

上，260頁)。

(98)『北海道新聞』1995年５月26日（夕），11面。

(99) 同上〔地方版〕2002年12月28日，20面。

(100)『北海道新聞』1993年６月５日，６面。

(101)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，250頁。

(102)『北海道新聞』〔道央版〕1992年12月29日，19面。

(103) 同上，1995年４月16日，22面。

(104)『北海道新聞』1993年６月５日，６面。

(105) 関係者の電子メールによる回答（2020年８月14日)。

(106) Kitara Organ Club編，前掲「札幌コンサートホール　オルガン設置への道」，94頁。

(107)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，260頁および262頁。

ただし，「シアターパーク通信」第10号には，「平成九年の札幌市音楽専用ホール（仮称）完成に向けて，パイプオルガンを中心とする音楽愛好者の輪を大きく広げる役割を担っていく意向です」とあり，もしかすると，この時点ですでに，Kitaraが完成するまでの期間のみ，運動を“継続”するとの思いが，同期成会のなかにあったのかもしれない（同上，262頁)。その証左に，「シアターパーク通信」1994年・春の号（1994年４月）でも，「オルガン期成会が，新しいホールにオルガンが設置される三年後まで活動を続けなければならない」とされている（同上，268頁)。

(108) Kitara Organ Club編，前掲「札幌コンサートホール　オルガン設置への道」，４頁。

(109)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，279頁。

(110) 当時の札幌市長・桂は，「やがて市民の運動が起こった。そうした幅広い動きが最終的に私のところに来たとき，そこまで要望があるのなら，よし作ろうじゃないか，と宣言しました。ただし，設置が目的ではなく，これをどう鳴らしていくかが問題であること。そして，ホールはオルガンだけのためのホールではないこと。この二つを強調しました」と述べている（前掲「未来へ奏でるKitaraの響き」，８頁)。

(111) https://www.soleil-hall.jp/about/p03.html（2020年８月15日)。

北九州市の事例では，「市民や企業に協力を呼びかけ，２年半かけて２億円の寄付金を集めた」という（『毎日新聞』〔西部版〕2008年11月26日，12面)。

(112)『北海道新聞』1991年12月16日（夕），10面。

(113) 同上，1992年４月３日，８面。

(114) 同上，1992年１月５日，７面。

(115) 同上，1992年１月27日，５面。

(116) 同上，1992年２月16日，７面。

(117) 同上，1992年７月23日，７面。

(118) なかには，「東京・お茶の水のカザルスホールで開かれた『第五回アマチュア室内楽フェスティバルコンサート』に初めて出演した，札幌のトリオ・ペンプレード

のクラリネット奏者布施久美子さん」を紹介する記事で，わざわざ「札幌にもあんな素晴らしい音楽専用ホールがあるといいんですけどね」というコメントをのせていたことは注目にあたいする（同上，1992年３月18日，４面）。

(119) 関係者へのインタビュー（2020年７月23日）。

(120)『北海道新聞』1992年９月11日（夕），19面。

(121) 同上〔地方版〕1992年９月12日，27面。

(122)『北海道新聞』1992年９月18日，７面。

(123) 同上，1992年10月17日，７面。

(124) 同上，1992年11月17日，５面。

(125) 同上，1992年11月23日，５面。

(126) 同上，1993年１月25日，５面。

(127) 同上，1992年12月８日，５面。

(128) 同上，1993年３月17日，21面。

同記事中，「既成会」と記されているのは，「期成会」のまちがいであることを付言しておく。

また，この記事がでるまでに，1992年11月22日，「中島公園の『子供の国』の跡地に，音楽専用ホールができる」とし，「ぜひとも音響効果に優れ，多くの市民の夢と安らぎが得られるスペースを備えた場所になってほしい。そして，幼児から老人までが音楽を楽しめ，時計台を愛するように，私たちの町にはこんな素晴らしい音楽専門のコンサートホールがあると言えるホールを創（つく）ってほしい」とする大学教員のコラムが掲載されている。もっとも，本文中にパイプオルガンという文字こそないものの，この当時，パイプオルガンの設置が議論されていたなかで，こうした文脈のコラムが掲載されること自体，同社がパイプオルガンの設置を肯定しているととらえられるはずだ（同上，1992年11月22日，30面）。

(129) 同上，1993年11月27日，21面および1993年11月22日，21面。

(130) 同上，1993年４月８日，21面。

(131) 同上〔道央版〕1993年９月20日（夕），８面。

(132)『北海道新聞』1994年１月18日，１面。

(133) 同上〔道央版〕1994年３月15日（夕），８面。

(134)『北海道新聞』1995年５月26日（夕），11面。

(135) じつは，連載１回目には，「この連載は文化部・池野敦志，森川潔，古家昌伸が担当し，八回の予定です」と記されていたが（同上，1995年５月22日〔夕〕，７面），結局は10回の連載となった。関係者によると，「連載の回数が変更になることは，現在ではありえないことです。だいたい連載企画は紙幅をとるものなので，何日先まで紙面を確保していることが通例だからです」とのことだが（関係者の電子メールによる回答〔2020年８月７日〕），このとき，「連載が８回から10回になったのは連載の１回目が掲載になった時点で，まだ取材は進行中で，進めるうちに８回ではおさまらないほどの内容になったので回数を増やしたということ」のようである

（関係者の電子メールによる回答〔2020年８月18日〕）。

(136)『北海道新聞』1995年５月22日（夕），７面。

(137) 同上，1995年５月24日（夕），５面。

(138) 同上，1995年５月31日（夕），５面。

(139) 同上〔道央版〕1997年７月５日，27面。

(140) 同上，1997年５月15日（夕），13面。

(141)『北海道新聞』1990年４月16日，４面。

(142) 同上，1996年11月２日，１面。

(143) 関係者へのインタビュー（2020年７月23日）。

ちなみに，現在の理事長・広瀬兼三は北海道新聞社代表取締役社長で，専務理事の鳥居和比徒は文化部長や道新文化事業社取締役のポストにあった人物である（『北海道新聞』2018年６月11日〔夕〕，６面）。また，前任の専務理事・永井健も，「1978年北海道新聞社入社。メディア委員，経営企画室次長などを経て，2011～15年に道新ロジスティクス社長」をつとめたのち，「18年まで札幌交響楽団専務理事を務めた」ことを付言しておく（同上，2019年６月13日，32面）。

(144)「STPの活動記録」編集委員会編，前掲「STPの活動記録」，254頁。

(145) 宮部・藤垣＝聞き手・井口，前掲「札幌コンサートホール［Kitara］」日本建築学会編，前掲書『音楽空間への誘い』，215頁。

Kitara館長の松前も，「地下鉄の駅で降りて，静かな公園の自然を味わいながら来ていただきたい。これは，今ではほとんどの方に理解されています」と断じている（前掲「未来へ奏でるKitaraの響き」，81頁）。

(146) たとえば，『朝日新聞』2017年５月１日，25面の「オケ公演，平日昼にシフト背景に高齢化・働き方の多様化」，『毎日新聞』2019年12月24日（夕），４面掲載の「この１年：クラシック　富裕層のコンサート」や『読売新聞』〔大阪版〕2012年４月５日（夕），９面にある「平日昼間にクラシック鑑賞　大阪フィルの『マチネ』人気」などを参照のこと。

(147) 現に，Kitara開館をまえにして，「札幌出身でバリトン歌手の木村俊光」は，「冬に横殴りの吹雪の中を地下鉄駅からずっと歩いてくるのは気の毒」と語っているし，当時の「札響首席指揮者の秋山和慶」も，「歩いていくことになるでしょうけど，本番を前にして大嵐（あらし）だったら…。私ならちょっとためらいます」との思いを吐露している（『北海道新聞』1997年６月１日，７面）。

(148) 同上，2017年６月28日，27面。

くわえて，「Kitaraには一般のお客さま用の駐車場がありません」という事実も大きく関係しているように思われる（前掲「未来へ奏でるKitaraの響き」，76頁）。

(149) http://www.city.sapporo.jp/ncms/reiki/d１w_reiki_nonframe/H419901010012/H419901010012_j.html（2020年８月15日）。

(150) 札幌市市民文化局文化部文化振興課編「札幌市文化芸術基本計画（第３期）」（2019年），45頁。

(151) 藤垣，前掲「キタラ物語」，15-16頁。
(152) 前掲「未来へ奏でる Kitara の響き」，11頁。
(153)『北海道新聞』2017年 6 月28日，27面。
(154)「コンサートホール事業部」（http://www.sapporo-caf.org/pdf/r01Gaiyou_Hall.pdf〔2020年 8 月15日〕），94頁。
(155) この点に関して，関係者は，「お見込みのとおり」としている（関係者の電子メールによる回答〔2020年 8 月14日〕）。
(156)「コンサートホール事業部」（http://www.sapporo-caf.org/pdf/28Gaiyou_Hall.pdf〔2020年 8 月15日〕），98頁。
(157) 札幌市芸術文化財団提供資料。
(158) 関係者の電子メールによる回答（2020年 8 月14日）。
(159)『北海道新聞』2017年 6 月26日，12面。
(160)『読売新聞』〔北海道版〕2007年10月 7 日，29面。
(161) 木下，前掲論文「札幌コンサートホールの設計」ドーコン叢書編集委員会編，前掲書『エンジニアの新発見・再発見』，167頁。
(162)『北海道新聞』1997年 6 月21日（夕），２面。